

## 悩め、苦しめ、青少年！

第9期 水田 弥英

小野ゼミに入会して、早2年が経ちます。「たくさん失敗して、たくさん学ぶことができるようなゼミを作りたい」という恐ろしく漠然とした目標を胸にゼミ長に就いた日を、今でも鮮明に思い出すことができます。

さて、漠然とした目標と少しの不安を小脇に抱えながらスタートした私のゼミ生活は、決して順風満帆ではなかったどころか、阿鼻叫喚をきわめていました。特に私



問題（自分の卒論）に取り組む著者（手前）

を苦しめたことは、全ての小野ゼミ生に求められる「自分で答えを出すこと」でした。つめこみ教育の申し子である私は、自分で答えを出すということが、てんで苦手でした。ゼミ活動——例えば、ケース・メソッドやディベート、ゼミ長業務——を行う中でぶち当たる、答えの用意されていない問題に取り組まなければならない日々、それは私にとって非常に辛いものでした。組織をまとめるとは何ぞや、リーダーとは何ぞや、と思い悩み、「リーダー コツ」と Google 検索を行ったこともあります。我ながら恐ろしいゼミ長です。

そんな「自分で答えを出す」ノイローゼになっていた私を救ってくれたのは、他でもない、小野先生、大学院生や第8期生の先輩方、そして同期、第10期生のみんなでした。小野先生や先輩方は、誤った道を爆走し、おかしい答えを捨り出す私を諫め、時に叱り、そして、正しい答えに導いて下さいました。また、同期は、私と一緒に、あらゆる問題に取り組んでくれました。入会当初は問題が発生する度に1人で震えあがっていましたが、時がたつにつれて「赤信号みんなで渡れば怖くない」ならぬ「大問題みんなで考えれば怖くない」の精神で、あらゆる場面で一緒に、「答え」を考えてもらいましたね。「適度にエグいスケジュールにするには？」「卒論の締め切りを守らせるには？」などなど。本当に感謝しています。

小野ゼミでの2年間を通じて、私は数多の問題にぶち当たり、数多の「答え」を捨り出してきました。それらの「答え」が全て正しかったとは思いませんが、悩んでいる時に周りからもらった「助言」と、それを受けて自分なりに出した「答え」は、私にとって、掛替えのない宝物です。それらを大事に大事に抱えて、小野ゼミに感謝しつつ、新たなコミュニティに飛び出していきたいと思います。